

夏。カレー



夏も真っ盛りとなった頃、私の主導していたプロジェクトもいよいよ佳境に入ろうとしていた。早朝に家を出ては、終電ギリギリで帰り、休みの日も雑務処理で出勤したりという日々が続いていた。精神的にも疲労困憊していたが、何より体がもう限界あたりをうろろしているかんじであった。

この頃は、帰宅してもまともな食事が喉を通らず、“あっさりしたもの、さっぱりしたもの”ばかりを妻に求め、それを義務のように食べ終わるとろくに会話もせず、ベッドに倒れこむようにして寝入ってしまうという始末。娘の顔を最後に見たのがいつだったのかさえもう思い出せないほどだった。

ある晚いつものようにぐったりしながら帰宅すると、キッチンからうっすらとカレーの香りが漂ってきた。カレーは好きだが、この夜中この今この体にカレーは、正直受け取れなくなかった。困惑半分、少しイラツとしながらテーブルにつくと、「杏が提案して一緒に作ったパパ向けの特製野菜カレーよ」と言われた。そう言われると手をつけられないわけにはいかない。気持ち切り換え一匙を口に入れる…と、それはびっくりするほどあっさりとし、まるい酸味が上品に効いていて、それでいてコクも十分に感じられる初めての味わいのものだった。

「トマトとたまねぎをよーく炒めてじっくり煮込んで仕上げたのよ、どう？」確かにその工程を伺えるおいしさだった。「あなたは、鰻も好きじゃないし、今はこってりしたものや油ものもダメでしょう。どうしようかって話したら、こういうカレーがいいんじゃないってネットで探してくれたの。」

家族のために働いているのだが、ずいぶんのこと一日一回もその家族のことなど思しもしない日を過ごしてきていた。そんな私の知らないところで、私のことを思ってくれている人がここにいる。その晩は、嬉しくてあまり眠れなかった。しかし翌朝の目覚めはよく、私はこの機に心身をリセットし、プロジェクトを全うした。